



深鹽袋

四

中村俊定文庫
文庫 18
328
4



李嶠詠物詩

日月風雲土地文寶金銀珠玉ヨリスベテ
器賤木竹草花生類ニ至テ詠物ノ詩 全

唐詩白圭

唐詩選訓解等拾 全
遺 李于鱗

梅花百詠

全

蘭齋遺稿

鳥山氏輯 全五冊

東郊文集

詩文 全五冊
祖徠先生閱 尺牘 則序跋祖徠草書

蘭齋一日百首詩稿

全

灞山詩集

南郭先生閱 長門瀧弥ハノ詩 全

陳駸文則

徠來先生校 全

蘆隱稿

南郭先生閱 詩文 尺牘 全

唐翁詩集

伊藤長胤閱 全二冊

詩法掌韻

詩作便要ノ書 全五冊

唐詩聯選

唐五言七言對聯ヲ 集ハ 全二冊

文章雋語

桐江先生著○五經及左傳之語ヲ悉ク抜萃ノ
スベテ國字分ニシ出所ヲアラハス



藻塩袋之四

四季混雜



瓜皮

晋共角

歲暮

太白堂桃翁

桃花

錦囊亭紀事

庭款

服部溶ノ

閑居菜花

活ノ坊舊室

若菜

活計堂友之

山吹瀨堂

掬堂永裁

花雪

中村祗祥

紅葉寺

喜多東巴

別鷄

笠間沾搦

天川

知之府葉五

山里月

坪井千楓



照清水 北九倫仙 鼓子花 菊岡紀之

青考 梅沢持扇 時雨庭 采山沾涼

鶴岡月 島野壽幹 鎌倉郭公 握菴原松

新田桃 板倉連国 腎一葉 植木沾雨

雪似塩 樋口左隣 千金花 粟津畦八十

夕景涼 晴行舎布仙 玉霰 柴田沾川

雨蛙 奥田州也 寒月 兩角志水

涅槃會 官商洞水語 初雁 四時菴紀逸

藻塩袋之四

菊岡采山著

元祿の以豫州松山の太守乃所著といふ作りの
凡の有りあつて凡の皮といふ所の事あり
一こゆいと言下りし作りの

凡乃皮水と 湯に流し入り 其角

○凡の皮 後周ノ王 羅客ト凡ヲ食フ客凡ノ皮ヲ削

ニ肉ヲ侵スコト頗ル厚シ羅力意コレヲ嫌フ凡ノ皮

地ニ落ルニ及テ取テコレヲ食フ客愧ル色アリ

○著聞集云 人こあつて凡と喰ひゆり而して或人
多法ハ皆空なること信同と出さるる事にて宋達は昨の物
なれども今に於ては其れをいふことありしものこと

○凡の大小と撰りし味いと撰るる人の飛英なりと取

○徒然草云 毎日の夜はさうしてさうも松ももりてあまの
 事そ人の門たきさうしてまわりまて何れかあんなあんな
 乃ちりてさうと云ふまじきさうしてさうも松ももりてあまの
 ○本綱曰鴨鳴呷呷其名自呷與鳧同名野鴨鳧家鴨
 以別之鳧在野高飛鳧在家舒緩不能飛○又云耐寒數
 百為群晨夜蔽天而飛声如風雨○種類多真鳧尾長鳧
 輕鳧羽白鳧大明鳧赤頭鳧華鳧芦鳧口鳧黑鳧等也
 ○或云半井ト類捕魚九節を以てつるものも月とて
 とびくまをれと云ふと云ふはよみと云ふと云ふはよみ
 乃ちさうと云ふの松とてさうも松ももりてあまの
 程細く養ふもさうも松ももりてあまの
 とつひとれと云ふ
 あまの松ももりてあまの松ももりてあまの松ももりてあまの

深草のあまの松と云ふは桃の花 紀泉

○深草のあまの松と云ふは桃の花と云ふは桃の花と云ふは桃の花
 乃ちさうと云ふの松とてさうも松ももりてあまの
 こゝろをさうと云ふは桃の花と云ふは桃の花と云ふは桃の花
 ようと云ふは桃の花と云ふは桃の花と云ふは桃の花
 ○金葉集連歌 桃客のそとの松とて咲きをれ松花
 梅の花はひたひたの松とて咲きをれ松花
 ○漢書云武帝時一足青鳥來帝前止東方朔曰當來西
 王母隱身而王母來奉桃實二十七枚是三千年来實上界
 果隱屏風後者三盜食之耳
 ○史記周本記曰維馬於華山之陽放牛於桃林之虛
 ○典術曰桃者五木之精也故厭伏邪氣制百鬼又云鬼

あるものの目なりと云ふ一牛一竹の子のこをまその西に園伽棚
と作り申すものの垣を隔てあつたの蓋棚をある一牛一竹の子の
と信して眉尺の光りつと云ふの帳の扉の蓋棚をある不動の像と
より水の清きものよりちのさかたけと作りて馬の皮を四合以
て蓋をあらわ敷法は生要集の木の抽物を入る候に琴籠
おのく一法を立いで申す折琴に鏡籠を置く一法を置く候に
るを置く候に申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
小札と作り出せり此のくくくくくくくくくくくくくくくく
といふ店の中にお地を去れあつた申す申す申す申す申す申す
別と云ふくのもの申す申す申す申す申す申す申す申す申す
下略

若菜の如蝶此枝嫌は海はあつた 友之

○菘玉集 芥又飛芥と云ふ所の芥をみるみる一食七粒

大の草と小野平野の円形は多岐の草を形似像は又草を
はく一様とりて禁裏へ申す

○荊楚歳時記云正月七日期俗以七種菜作羹食之入無
万病矣 ○師曠曰歳欲豊井草先生年ハナツナク歳欲苦苦
草先生 苦ハハイ又ナツナク 葶藶本綱云初春生苗葉高六七寸
似荷根白色枝莖青三月開花

○莊子曰昔者莊周夢為胡蝶栩栩然胡蝶也自喻適志
與不知周之夢為胡蝶與胡蝶之夢為周與周與胡蝶則
必二分矣此之謂物化

○杜陽編云唐ノ穆宗ノ禁苑二千葉ノ牡丹開ク黃白
ノ蝶數万飛テ花ニ集ル網ヲ張テ數百捕得見レハ
乃ニ悉金玉ナリト ○夫木集 ちりちりちりちりちり
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
仲心

とらんも今くちりー其漢川下宇治川子到け不い夏至小異
の君とゆりとりんえうととと濃田の多のい志うんも又
西ハ宇治橋を渡りて下るを奇なりん俗ハ水改の亡死
くといま可笑れあてー漢見の推無解集

さのすもりやもあけーうすもりの今や
西のこけーてんやとけり空子と野を
しこと尺ありけるよそをやう出た

花の雪雨子柳りけーくそう素 袿祥

禅林ち友七首そ 花飛如雪 ありはる

あし香に尺えまふはけりうかむはまうぬえんそまーくう

○女聞 妻をふりうらうふ尺建さうれくー
こそとーそらめかこをまれ 長恋

○釈名云雨羽也如鳥羽動則散○陸佃云地氣上為雲
天氣下為雨○天晴陰雲合春陰雨脚垂

○虚靈の哉ハ切字ハあはれとては句ハ上とて切らあま
かようゆひかー中奥然うれと切字子用ひる飛句あま
乃とゆら虚字のうかめ多くとと切字と入くし又切字あ
くくはるのあてくまそめとまよーまうー何の本のれ
とまー尺白ひつ子慄うへーあらひきり細びと川子 是ホハ
虚字のうかめあまゆ人との切字とあてく或云虚押の字乃
或留けとも上のまうあてく向ふ如く古人の上其んを以て
虚灵の哉をうひるもて後人その分地もかくして因ひ
あんとつたあり又云支體然藝聖財の字のうも居ううた哉か
何ーあまもすいそのまうありあをまて古人の句と入及
びてうう子哉とまらる向あまて尺とゆらし

ありてんちかむるぬきある十そ福もして

侍宵のゆめゆめ種のおきかへとありぬきものなるものうへ
は秋より侍宵小侍位と唱せしり八月十五東指列福系より
四都の月を黄せんとして実定卿はたまたまあるおのちと
沙弥位ありまして嘆くも所なき侍位をぬれくして
やう海実定卿の位なる蔵人より所ひけり立解り何
半もそもしておまこと乃おひしれしやうき大平々々
ど備へふきさうなるぬきやうき入り車寄に侍位のま
きる前よりかきやせとゆとちかかきつじおきぬる物
とりふきとそまの物しる里のちのちのけきと

物ふと君のひひらんおのこのきしり小悲しか
とまうのひひけてぬき走りて車のまへまでぬき
ひのきとやせんといふしりぬきぬき終りて熱病入る

△此大宮ハ洛陽曼華院とのみ比丘尼所不し今に侍宵小
侍位とて女房をぬかちる又徳大寺家にも色乃加波
の祿号ある徳太史あり

○延久年中伊勢齋文の時^平糺を祓禊とある祠あり村民
ちを祭るに糺其糺たすく久中^{ナガ}疵をくくは糺を祓る
者糺ありか一の事陣座に及びて法にさへくやある中に脚
大納言信信卿やて曰く白龍之魚勢懸預諸之密網ととる
いひてぬきさうはかひしき祓をくくを糺のまうにけき
おらんを祓たんに何の糺おんとして糺の魚の海に
海よりぬきを預諸のまの網にさしてうききぬ
又く大濤子かきりて新王にまらりあるよ新王の白河に魚の
海といぬるされとて糺子かきり今よりなす糺あり
海きくしとつひる今新王の宮へはるし下略後園見

いんげんきりふらやうましく破いぬもゆる焦熱大焦熱の燭の心を
あやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふく
あやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふく
あやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふくあやふく

○本綱云旋花生于田野甚多難鋤艾治之又生其根拔
截置土灌既波旬苗生逐節蔓延葉如波菜葉而小至秋
開花如白牽牛之花而粉紅色不作瓣狀如軍中所吹鼓
子故名之不結子其根白色大如節

○大全本州云旋花俗謂鼓子花其葉似薑花赤色味辛
美子狀如豆蔻此旋薑是也矣

○一種千葉者色似粉紅牡丹謂纏枝牡丹
○鄭谷經賈島墓詩云水繞荒墳縣路斜耕人訝秋
久咨嗟重來蕭瑟無尋處落日風吹鼓子花

○多識云波也此登久左案此留加保是鼓子花也矣

音さしや賤う管奈も華清宮

持扇

○東坡詩 可城望耕交綠浪風掀舞

○劉禹錫詩 麥隴風來翠欲流踈踈小雨似深秋

○大旅來故名大ト年モ亦
大

○本綱云大麥苗粒皆大於來故名大ト年モ亦
大為立穀之長矣
大麥收後あり 赤麦は赤色にして肥く 音標大麥は似て
粒大く皮厚く麩多敷なり 糲麦は大麥ムキヤスあるものにして酒に
醸すものなり ○麦早きは九月の種を下に映さる五月の
種をおりて四月苗熟するその苗の雨立春より而二十
日少ぬるを旬と云ふなり 落し麦は五月の種を
三月の中より前へ下りてくる

鎌倉一見乃時

月院や千代もかたく鶴の岡 壽躰

○新拾遺集 鶴の岡あると云はれし月井の
ひくくよる代の考 左衛門督基氏
つるまの一名を井井と云ふ

○玉葉集 月夜秋久 正二位季經

雲井はく幾万代に傳ひし月よあはれし秋の夜人
○東鑑云鶴岡八幡宮ハ伊豫守源頼義勅を奉り安倍貞任
征伐の時丹祈の旨ありし康平六年秋八月遷居石清水
勅後一為由比御子立永保元年二月陸奥守源義家
僧行より其後治承四年源頼朝祖宗と崇めんとせり
小林御の心より遷し宮廟と名すハ鶴岡曲の文と云
亦遷しなる下宮と云ふ又建久二年その上の地

別々のと云ふ事と云ふ上ノ宮と云ふ所祭の由比の事ハ今日此
と云ふ○夫本集 鶴の岡あると云ふ事ハ今日此
まゝの事と云ふ事ハ今日此

○上ノ宮三座 應神天皇東ノ間ハ神功皇后 母神と云ふ 西ノ間ハ
祀大神 乙妹神と云ふ 仁王門の敷ハ良怒法親王の事

○下ノ宮四座 仁徳天皇東ノ間ハ久我。宇後 二神凡仁徳帝の妹神
西ノ間妹神と云ふ 若宮大権現の敷ハ法親王の事

未社の中ハ○玉垂咄神ハ高良大臣と云ふ 是應神帝ノ臣下と云ふ
○松童 元大武 松童ハ應神帝の牧牛 元大武ハ同ク車牛と云ふ

○白菰咄神ハ源頼朝公 本像あり 乳家の造と云ふ
○柳宮咄神ハ源実朝公 乳家の造

○回御影 當社社室の影を中ノ才ノ才一掃物ありし事
少と云ふ事ハ一掃の影はしき箱に納り十二夜ハ毎

一月交代し守り相傳ふ頼義公貞任建儀の時多事ありけり
 多事ありけり復身して捕利を降る其後義家公東征乃
 時中より又頼朝公伊豆にありし時夢に異人來つて其の
 言と假名形相國家と學はりし二位尼を仰ぐと云と信ス
 時頼乃代り至つて當社の納む

○徒然草云最明寺入道鶴園の社奉の記に是利なる入道の
 ともてん使はつたりして立たるをさうけりてありし時
 けりや一秋子しらありび二秋子海舟三秋子のしらありてやぬ
 その名子まらまぬ際非傍にありしころ人よりてたてし
 たりとて年ころより是利の深物なりとてさうけりて
 利をさうけりてありしころ深物三十ありて女房ともい少袖
 にてさうせきせくほよつたきまらりその時尼より人らうすて傳り
 しがさう傳りあり

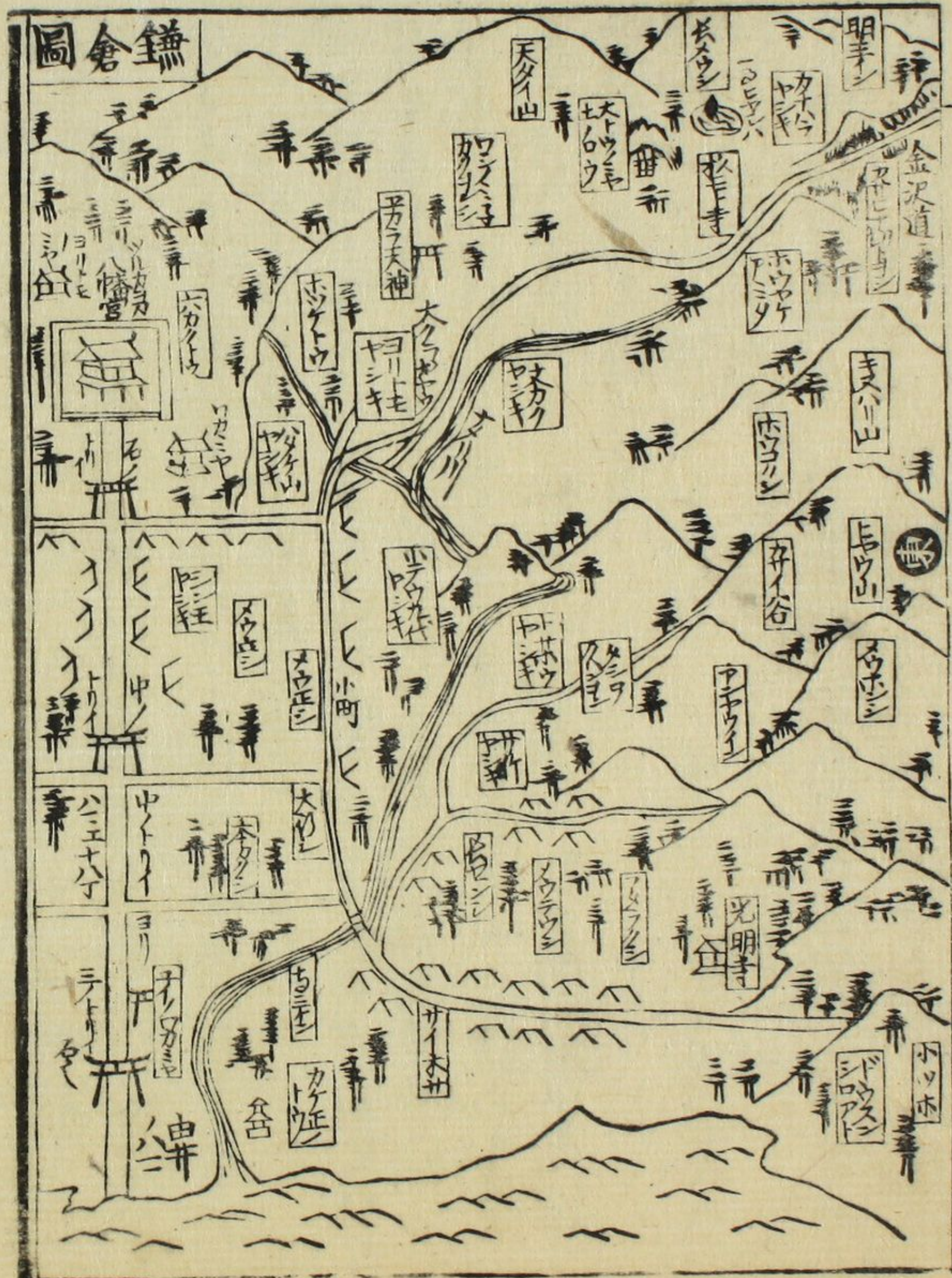
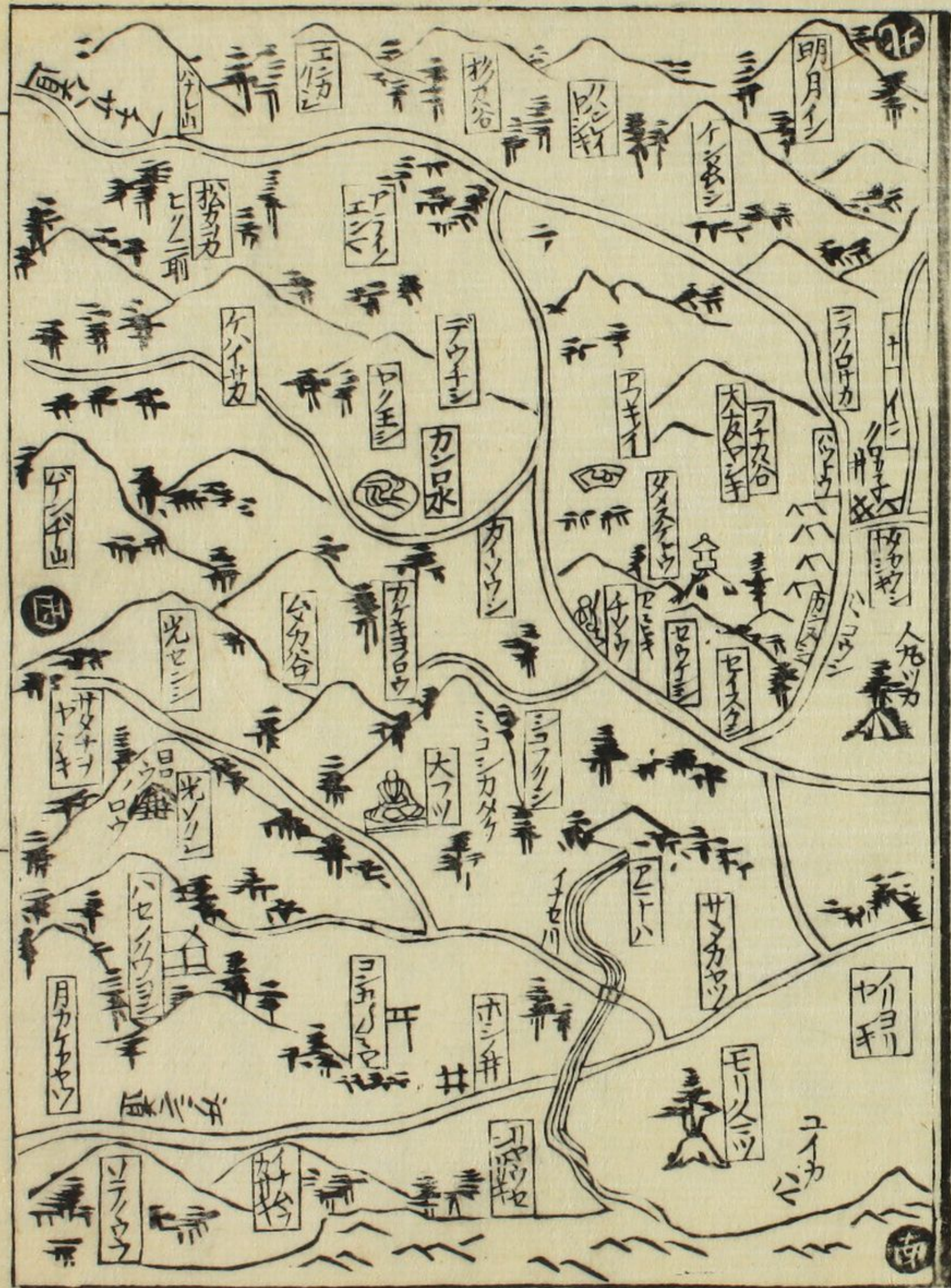
鎌倉乃くみ源氏や奉りて

京 狸ヶ巻 原松

○万葉集 菊ころか由りしころのさうり本を松とて
 いさくまはくやわん まる人

○鎌倉志云鎌倉と云強と理ひ倉といふ事とて其強錫の
 びり大蔵冠強足といふ強子とてせりしころ宿願のりありて
 席巻奉納の時比由比の里に宿りしころけり夜夢を感
 年未而宿りしころ強を今の大蔵の松の園の理ひ
 けりより強倉郡といふ

- 谷七御 小坂御 小林御 葉山御 津村御
- 村岡御 長尾御 夫部御
- 七八口 名越切通 朝比奈切通 板栗寺切通 龜ヶ谷坂
- 化粧坂 巨福寺坂 大佛切通



武藏野の新田畑をて桃の花

川越

連四

○拾遺集 漢より三月音子人のそのの歌をひらけ 大言

その花若よなきをまわす金けものよ人の名ん

○謝靈運詩云山桃紫紅萼野蕨漸紫苞

○正三位季經の哥に ひびきあやすもさゆり

とくく介てぢやゆれやあまのを けさのあまくたさの田は

なりて今びきよの秘するよんをたぬより府中名字のりく

○神代卷云以粟稗麥豆為陸田種子以稻為水田種子

○易繫辭曰神農始テ耒耜ヲ作

○通傳云皇帝始テ歩ヲ立テ畝トス

○史記夏本記云雲土夢為治 注孔安国曰雲夢之沢

在江南其中平丘水去可為耕作畝之治

魚遊る罾子と海の一葉のれ

川越

沾雨

○紹巴至宝抄云一葉のりよのなもとのるは秋はての拵桐一葉

落天下秋と作りはる拵桐のりよとPありん矣或云研

○夫木集 春もこころさそあそめあそすふふ

あらしよあつめふいゆのち紙 仲心

○葉唐卿漁父詩

網裏無魚毎酒錢 酒家門外口流涎

幾回欲解蓑衣當 又恐明朝是雨天

○綱 董仲舒策云臨淵羨魚不始退而網

○三才圖會云罾罾板罾提罾其三制俱相似

○宇索ハ罾 增魚網有棧者也

○殺生 弘法大師釋曰地獄猛焰生殺生業

紙ぬき... 二品その時信... 竹の葉... 布仙

涼しき竹の葉... の夕日影 布仙

○塙川院百首... 匡房

○杜律 山木蒼々、落日曬竹竿、梟く細泉分

○五雜俎云羅浮巨竹圍二十尺有三十九節節長二丈可為桶斛又云舜林中竹可為船楫人以大竹為釜物熟而竹不灼也

暮にせよ霰... 日玉はくき 沾川

○塙川院百首... 肥後

五雜俎云霰雪之未成花者今俗謂之米粒雪雨水初凍結成者也

○霰 美曾礼 電 阿良礼 和名抄誤也可改云

○玉筩 八雲抄抄云正月神子の日の松を引て... 初天子日小松玉筩

○袖中抄云正月三日侍從堅子王臣等内裏の東を極下... 万葉 東

け初との秋にカ葉集才二巻ノ入ノ四十六代孝謙天皇天平宝字二年
 正月三日高麗の使下つりておとろけと流りてその時一旅の時
 強子給辰初夜よりくま脚少の奇と流り一詩を旅しむる時
 大伴宿禰麻呂のよきとる秋し 或云垣下と正客の相伴と云し
 志賀子のむは脚を拉の所長前をこひて居のいふとくしてゆく
 木の流の奇とよきとるといふより能因の経依よりとくしてゆく
 小遣にきと人の強とるよきとるに寄り時よかておの電を流し
 京極の所長前は五十九代宇多の帝の時し時平公の所母なり
 志賀子とて後ひり一旅の時のみし
 ○或云玉帝に著しりか葉集しおとろけを初子かへて初子の目登
 ちの室を十四五歳まで女の年のとく一なるにたうまれとくとい
 よくあつとておとろけと流り初ひの長あてとておとろけと流り
 といふしめどい尻尾まのゆるまのし

置土も雨に流して蛙うね 州也

○夫木集 表あり物白のふ田をきそんん
 晴のあしとる蛙うねあり 秋長

○古今集序云初子初とる言水よとて蛙の声をきけといふ
 としいあるとてのりも奇とよきとる 註云言の初はまよ
 して鳴き蛙の初めありの流ておとろけを初しよろとて啼い昇秋
 なりうねと流りも三十一字あり初も感歎一語終まらむ
 皆弄しとる蛙の二つを奉て茶の生煎の事をわくせんとるの
 能歌蛙の流り流り川用いふ

○續日本紀云稱徳帝時神護景雲二年肥八代郡蝦蟇
 陣列廣可七丈南向去及日暮不知去処拒武帝時延暦
 三年五月蝦蟇二万計從撰州難波南行池列可三町入

四天王寺内悉去ル矣

○著聞集云後淡川院寛喜三年の夏高陽院及の南の大池に
渡り蝦カマ蝦カマ千集りて喰合たり一番くま喰あひてあまの
喰殺さる或は斤息にして腹白く成りありたり於て死す
集りけり或人蛇を求めて投入るるまおも怖るまはし
蛇もすく吾人とせし逐去り

○雍州府志云井手のあま下沖園浦にあり余の蛙その音
清朗なり世に所謂井手の蛙也なり

○河列物部天野の辺に西行田といふありを浪て蛙鳴す

○蝦蟇和名加波流蛙和名阿末雨降るとするに其鳴因て雨蛙俗云加波流云

○本網蛙後脚長故善躍性好坐故曰坐魚俗謂之青蛙
其声自呼大其声則曰蛙小其声曰蛤又云農人占其声
之早晚大小以上豊歉蛙亦能化為鴛鴦鴛鴦之

信列ス可

月一ッ障る祭もかた寝さか 志水

○新古今集 風をよみ木の葉をれゆくよあくま

あまのくまぬきさる月の月うき 式子内親王

○赤えり而そ 木のそらる栂あつらふぬさる

みまらるるせぬ月のけうか 活玉

○今夜生公講堂月満庭依舊冷如霜 東坡詩集

○坐オウ覚ウ飛霜鳴ヒコ屋ウ天如寒鑑月如氷 活法

○徒然中云望月のうらなれを子望のかすてあめくるよるも曉
らしくあつてまらしてふらふと心さうわをさるやうしてあつた心の
板の柵をええする木の葉のうげうらうらとあつてあつた心の柵を
ちくわつてし推察あつてあつた心の柵をちくわつてあつた心の柵を
めきくるとそあつてあつた心の柵をちくわつてあつた心の柵を

子やめんのうらなもきしをつひへしよゆとていせんら
 を引つきていしをいしよとていしよのふたあり
 紙をみちのまをのを雪のまを云其時をさしていしよとて
 何せんとて八九十のうらなもきしをいしよとていしよとて
 年満とていしよとていしよとていしよとていしよとて
 なし満とていしよとていしよとていしよとていしよとて
 ○素問云年四十而陰氣自半也起居衰矣注云内耗故
 陰減中乾政氣力始衰月云
 ○靈樞云人年四十腰理始疎榮花稍落髮斑白也
 ○禮記王制篇曰五十而始衰六十而始衰七十而始衰八十而始衰九十而始衰
 子曰吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而知天命六十而耳順七十而從心所欲不踰矩論語
 四之卷終

儒書曆書品目

定榮堂

大坂心齋橋南四丁目

吉文字屋市兵衛

古文孝經

孔安國註

改正訓点

全四書集註

小本道春点

全五册

孝經大義

改正好本此與各入候ヲ御改御求可被成候

孝經大義詳解

全四册

陳明卿史記考

全五册

自觀政要頭書

十册

助語辭國字解

穂積伊助撰

助語辭國字ヲ以テサトシ安ク詳ニ解ス

春秋列國圖

戰國ノ時ノ國名ノ替リホラ委ク記ス

日本書籍考

古代ヨリノ神皇國中実録詩文故事有職ノ書スベテ真偽ヲ糾シ大意ヲ記ス此書ヲ見テ凡和學ノ大成ヲ知レ諸君ヲ見ル其明也和春ヲ好者必讀ベキノ書ナリ

典題說

羅山先生著 ○五經十三經 學スノモ此書ヲ見レバ經各ノ奧

和漢年表錄

和漢ヲ上下ニ書クケ年曆ヲ見ルニ甚以便利ヨクス尤委ニキ年代記ナリ

年中風俗考

年中ノ故事 年曆ヲ記ス

正運記畧

日本開闢ヨリ年曆奇事要異等委ク記ス學者ノミルベキ年代記ナリ

大成正字通

至テ字ノ多キ字引ノ節用ナリ字ヲ悉ク改テ音訓ヲ糾シ假名遣ヲ改ム連誹用ル季分詩文經書ノ熟字ヲ悉ク出レ傍ニ誤ヲ附字毎ニ平仄ヲ記シ著者ニ異名漢名ヲ附ス尤字ヲ求ルニ至テ早キ書ナリ

折本

全

